

# 『武道伝来記』論

——〈悪〉の造型と悲劇的世界の形成——

篠 原 進

「男色大鑑」にはあきらかにテーマがあった。男性の慕情といふ特異な題材を通じて、義理と意気地と任侠の上に咲き乱れる壮烈な精神美がうたひ上げられてゐる。その序や序章において、我とわが魂を燃え立たせてゐる西鶴であつた。ところが『武道傳来記』にはさういふ一貫した魂の炸裂がない（『西鶴——評論と研究』上・三九八頁）。

「作品としての武家物はつまらなかった」、こう言い切つたのは片岡良一氏である（『井原西鶴』）。右の言葉に代表されるごとく、西鶴の武家物、とりわけ『武道伝来記』（貞享四年四月刊）への評価はあまり高いとはいえない。実際、片岡氏はそれを「何等の味もない作品」（『同書』）と貶したし、森銑三氏は「凡作」と断じ、遂には西鶴の作品であることを否定するに至つた（『所謂西鶴作浮世草子の半数は他作なり』『西鶴研究』三・昭和五年一〇月・一五頁）。

なるほど、一方では「それは飽くまでもそれら武家物が西鶴作品中の一流品と較べられた場合の話であつて、それらを全然取るべき価値のない愚作なりとするのは行き過ぎではあるまいか」（東明雅氏「西鶴武家物攷——非西鶴説を中心として」『西鶴研究』四・昭和二年一〇月・三三頁）といった反論も根強い。だが、その東氏自身も「文章は確かにぎこちなくて、何らの魅力もないよそ／＼しい文章」（『同頁』）と『武道伝来記』の瑕瑾を認めざるを得なかつたというのも事実なのである。

暉峻康隆氏は同年の正月に上梓された『男色大鑑』に比して、『武道伝来記』が劣る所以を以下の如く記している。

「魂の炸裂」とは、いかにも『男色大鑑』最頁の暉峻氏らしい形容である。確かに、『武道伝来記』は一見、そうした熱を欠いているように見える。しかし、翻つて考へてみるなら、いったい西鶴の作品に、「魂の炸裂」がむき出しになつてゐるものなどあつたのだろうか。むしろ、感情の表出がストレートでない点にこそ、彼の特質があつたのではなかつたか。

「これまで出現した武家物への批判を、そのまま私は受入れようとするものではない」（『西鶴の創作意識とその推移』『近世小説史の研究』・九一頁）と、弁護に立つたのは中村幸彦氏であつた。すなわち氏は、『武道伝来記』に「意識した談理の姿勢」（『前掲書』九一頁）を認めた上で、こう書いている。

武家物における武士は、現代からの批難よりはかたに描かれてゐるのではなく、うか。又彼がその序で述べた如く、武士を語ることが眼目でなく、武士を通して人間、それもかくあるべく、かくあつてはならない人間を語らうとしてゐる（『同書』九一頁）

と。「西鶴は武士の人間としてのあり方を見ようとした」（中村幸彦氏「西鶴文学における武家」『国文学』昭和三年六月・七六頁）。中村氏の主張はこの言葉に尽きて

いる。つまり、西鶴は武士を描きながらも、その彼方に階級・職域を超えた人間そのものを見ていたというのであり、「敵討ちを通しての人間の生きざま」を主題としたものである。歴史的に見るなら、『武道伝来記』を再評価するためのヒントがここにあったわけであるが、現実はそのようではなかった。事実、中村氏自身も、そこで「武家物に助力者があるらしい証の若干は私も持つてゐる」<sup>(『西鶴の創作意識とその推移』)</sup>近世小説史の研究・八六頁から八七頁と示唆したことを踏まえて、「西鶴工房」の存在を推定する方向へと向かう<sup>(『西鶴入門』)</sup>解釈と鑑賞・昭和四四年一〇月。また、野間光辰氏は、「敵討の最後の華々しい場面よりも、敵討の動機、敵を討つまでの過程を丁寧に描いて、討つ人討たれる人の悩みや苦しみに筆を及ぼしてゐる点」を評価し、「人間に対する理解と観察の深さ」を『武道伝来記』に認める傍ら、武家物執筆の外的必然性を以下の如く求めたのである。

西鶴は日本の読書人口の主要部分を構成する武家階級を目当てに、特に販売ルートの関係から日本最大の武家都市である江戸の読者を目当てに、『男色大鑑』に引き続いて武家物の作を著はしたのである<sup>(『西鶴と西鶴以後』)</sup>岩波講座日本文学史・三二五頁。

前者は所謂「西鶴工房説」であり、後者は「武家読者説」であって、両説はその後、谷脇理史氏の反論<sup>(『出版ジャーナリズムと西鶴』)</sup>講座日本文学・西鶴上・昭和五三年一月を誘発しながらも根強く定着するに至る。

こうした横道に外れることで、『武道伝来記』の再評価という方向は頓挫したかに見えたが、前田金五郎氏の徹底した素材研究<sup>(『武道伝来記』の事実と創作)</sup>『文学』・昭和四一年七月※詳細は翌年四月刊『武道伝来記』(岩波文庫)により深められ、別な展開をみせることとなる。つまり、前田氏は従来素材研究<sup>(『睡庵康隆氏』)</sup>定本西鶴全集<sup>(4)</sup>・解説。中村幸彦氏「西鶴の素材」『上』一三九号・同「西鶴と説話」『日本文学』三八号や、構造分析<sup>(宗政五十緒氏「武道伝来記」の構造)</sup>『国語国文』・昭和三五年三月。野田千平氏「武道伝来記ノート」『名大 国語国文学』・昭和三五年二月の成果を踏まえながら、一挙に一三種もの素材の「推定」を行った上で、「近世初

期<sup>(傍点引用者)</sup>の敵討物語を綴る意図」<sup>(『岩波文庫・補注・三四一頁』)</sup>をそこに読みとったのである。『武道伝来記』はこうして、近世初期の武士を主人公とする歴史小説、モデル小説と位置づけられ、そのコンテキストの中で読むことを余儀なくされるに至った。

そんな経緯を踏まえて書かれたのが、谷脇理史氏の近稿である。つまり、氏は前田金五郎氏の素材研究<sup>(先掲)</sup>を徹底して批判し、『武道伝来記』の再評価を提唱したのだ<sup>(『武道伝来記』の再評価―「虚妄の説」の説)</sup>『武蔵野文学』30・昭和五七年一月。『武道伝来記』論序説―読みの姿勢をめぐる<sup>(『文学』・昭和五八年八月)</sup>。谷脇氏の主張の基本は、『武道伝来記』は現代小説として読まれるべきだということろにあり、論旨はほぼ次の言葉に集約できるであろう。

④『武道伝来記』の西鶴は、当世の武家社会を当世のこととして書くことを、はばかり、時・所・人名を仮構し、事実にもとづく場合でも、それを自在に組み変え、創作を加え、意図的に虚構化している。⑤『日本武士鑑』序で批判されるように、それは「虚妄の説」であることに違ひはないのである。が、それは、西鶴によって意図的に「虚妄の説」として作られているのであり、むしろ「虚妄の説」という前提で読まれるべき作品なのである。……⑥それをどう読むべきか。答は簡単である。『武道伝来記』は、同時代の浮世を生きる武家の論理や心情を虚構によつて具体化し、読者に浮世の一面を認識させる、文字通りの浮世草子、当世を描いた本として読まれなければならない作品なのである<sup>(傍点原文のママ)</sup>。『武道伝来記』論序説<sup>(一五頁)</sup>。

なるほど、④を主張するためには、前田金五郎氏が指摘したものとは別の確実な典拠を示すことが大前提となる。だから、「典拠探索に行きつまっている」<sup>(一四頁)</sup>谷脇氏にその資格はないという見方もあるだろう。また、⑤⑥の説はあくまでも④が成り立つことを前提として出されたものであり、④が成り立たなければ⑤⑥も成り立たないと言えるかも知れない。しかし、私は必ずしもそうは思わない。なぜなら、前田氏の指摘した典拠の中には、モデルというよりは時代背景と呼んだ方が相応しいものも少なくないし<sup>(例えば、巻一の三・巻二の三・巻二の四・巻五の二等々)</sup>、一見学問的に見える典拠論の持つ思いがけない陥穽を谷脇氏の論

文は、鋭く衝いたと考えているからである。

もちろん、こう書いたからとて私は谷脇氏の主張に全面的に賛成だというわけではないし(特に④の前半部)、素材論を背景とした前田氏の論文の価値も依然として揺るぐことはないであろう。ただ、『武道伝来記』を論ずる際、大きく立ちはだかっていた前田論文の重さから、ほんの少しだけ自由になったということだけは言えるのでないだろうか。

谷脇理史氏の論文に啓発され、私なりに『武道伝来記』を読み直し、ささやかな再評価を試みたのが本稿である。

## 二

それは、一発の銃声からはじまった。きっかけは幼君にせがまれ、楓の枝を折っていた隣家の中間が木の上から夫婦の寝室を覗き込んだことにある。木登りについて、事前に断りがなかったことを確認した安森戸左衛門は怒って言う、

「其身、常々、殿の権威をかりて、古座の諸士を、ないがしろにするさへ、憎しと思ふに。此ことはりなきは、いよ／＼踏付たる仕かた」

と。隣家の主人(大壁源五左衛門)に対する積年の恨みが銃口に込められ、中間は即座に打ち落とされることとなる。

『武道伝来記』中の最長編(後掲表二六頁参照)、巻四の三「無分別は見越の末登」の発端部分である。以下、それを契機に、両家の争闘がはじまり、父(源五左衛門)を討たれた小八郎は、様々な辛酸を嘗めた末、敵(戸左衛門)方に奉公する機会を得て、これを討つことに成功する。しかし、西鶴は小八郎に非情な「後日譚」(輝峻康隆氏『西鶴―評論と研究』上・四〇六頁)を準備した。つまり、敵討ちを認め御家再興を図ってくれる筈の殿は既に亡く、公認の敵討ちだという小八郎の申し開きは認められず、逆に主殺しとして処刑されるというのが、それである。この結末部分について、次のような解釈がある。

① おそらく実際にこのような事件があり、西鶴はその事件にもついて執筆したであろうが、この後日譚を書き加えたこと<sup>(傍点引用者：以下同じ)</sup>によって、西鶴の言おうとするところは明らかであろう。敵討ちという行為に十五歳の少年を駆りたてる習俗、しかも小八郎の危機を、状況の変化によって救おうとしない無責任さ、冷酷さを指摘しているのである(神保五弥氏『鑑賞日本古典文学・西鶴』二四五頁)。

② 有為な青春を復讐といふとげとげしい行為に駆り立ておきながら、いざとなると主殺しの大罪から救はうともしない習俗の無責任さ、冷酷さを指摘してある(輝峻康隆氏『西鶴―評論と研究』上・四〇八頁)。

モデルとなった事件が不明な現在、①の傍点部で「書き加えた」と言っているのは少し早計である。ただ、既に述べたごとく、さし当って本稿はモデルの問題について言及しないことにしているので、それはそれでよい。問題は、結末部分を右のように読むことで次のような主題が導かれ、それが定説化してしまっていることである(因みに、①は②を踏まえたものであり、両者はほぼ同じ)。

敵討ちという武家社会の習俗を、西鶴は冷静非情な眼で観察し、そのむなしさ、愚かしさを指摘しているのが『武道伝来記』である(神保五弥氏・前掲書二四三頁)。

「あはれなり」。西鶴は小八郎の悲話を、こう結んだ。彼は、それを生み出す要因をどこに求めているのだろうか。因みに、森山重雄氏は、そこに③「あきらかに敵討が機構の犠牲となつてしまつた例」(『西鶴の世界』一四八頁)を見、森耕一氏は④「武家社会の強権や掟と個の矛盾が激化して、個性性の主張が圧殺される状況」(『西鶴武家物考』『近世文芸―研究と評論』・昭和五三年六月・四頁)を読んでいる。また、浅野見氏は、「討つ者と討たれる者とが宿命的な状況に陥っていく劇的な人間の物語を、偶然の中で把えようとする方法」によって、「小八郎が一転また一転、⑤悲運のうちに奔弄されて遂に悲惨な結末を迎える悲劇性に主題」(『西鶴武家物の方法と主題』『国語と国文学』・昭和四六年一〇月・三七頁から三八頁)が導かれて行くのだとした。

習俗(①②)、「機構」(③)、「強権や掟」(④)、そして「悲運」(⑤)。それぞれ、充分に首肯し得る見解である。ただ、私は小八郎の父・大壁源五左衛門が典型的

な「悪」として造型されていたことと、それに対する安森戸左衛門の憎悪が極めて深かったこと（本節の冒頭引用部分参照）、の二点にどうしても、こだわってしまふのだ。すなわち、源五左衛門は冒頭で、こう紹介されていた。

肥後の、むかしの国の守なる、御城構の外、新造作の門櫓、長屋作り、美々敷、立ならびたるは、どなたの御屋敷と、尋ねければ。是は、彼出頭に暇なき、大露源五左衛門といふ新参者。續廿五石より、三年の中に、式千石、とりあげたる者の、拝領の地なり。

新参者でありながら、殿に気に入られて、仕官後わずか三年で二千石取りとなり、豪邸に住む源五左衛門。彼は登場した時点で既に「悪」として造型されている。波線部④の主体が気になるが、とりあえず次を見よう。源五左衛門がなにゆえ殿に気に入られ、急速に成り上ったかということが、一般論にまぎらかしなから記されている。

今時は、武道はしらひでも、十露盤を置ならひ、始末の二字を名乗ば、何所でも知行の種となりて、譜代の、筋目正敷者は、かならず先知を減少せらる。世は色々にかはりて、今より末々は、諸侍たる者、刀の代に、秤を腰にさして、商ひ、はやるべしと、さたする時。

既に指摘のある如く〔富士昭雄氏他『武道伝来記』（対訳西鶴全集）・一五四頁など）、この批難は『浮世物語』（巻一の七）のそれと類似する。

今の世は、武勇も音勘状も氏も系図もいらす。算盤を得たるか、田畠の積りを知りたるか、米の売り様、金銀のまはしをだに心得たらば、召しかかへられん

なるほど、両者は武士の墮落と商人化を嘆じているという点で近い。だが、重要な点が違っている。それは、出頭人と譜代の家来の軋轢についての問題だ。つまり、『武道伝来記』にはその点についての言及があるし、強く問題視していることである。出頭人を他の傍輩たちは、いったいどう見ていたのか。時代は下るが都の錦はこう書いている。

清白節義の士を抱るに。大分の知行をもつて。呼といへども得べからず。いにしへの伊尹。今の伊藤維提<sup>いとうゐだて</sup>是なり。老貞の士を求るに刑罰をもつて。脅かすとも得ることあたはず。むかしの（11ウ）伯夷。当世は完戸光風がごとき是なり。……都方に。賢人君子忠臣義士。皆埋れて有といへど。誰取揚る人もなく。今はたゞ鼻先知恵の簡略者。三露盤をいひ立にして。頭から大禄を請。町人の分限者に近付じやといへば。いづれの家にも重宝がられ。御為者といふ異名を付て。肩で風切腰抜もあり〔巻四の三「駒田主水出頭」の事』『御前御伽・元禄一五（一七〇六）年正月〕。

本名（宋戸光風）を出していることでも分るごとく、才ありながら、仕官を果たせなかった都の錦の悶々とした気持ちの右の言葉によく表わされている。<sup>（註二）</sup>因みに、そこでの話は次の如くである。

出頭人・駒田主水の男色に殿が溺れ、その言いなりになったため家中の風俗・賞罰は正しからざる状態になっている。それを憂えた小笠次郎助は主水を殺してしまふ。殿は怒り次郎助と、同席した脇坂菊之丞とに切腹を命ずるが、主水の跳梁に不満を持っていた家中の人々は小笠に味方し、二人を逃がす。それを知った殿は狂乱のごとくなり、悪行つにつて遂に御家は取り潰される。

都の錦は、またこうも書いている。

今世間を見るに前なる利欲にたぼれて後なる禍を忘れ、心に任せて私を行ふ事甚多し。武家にては出頭人、町人にては飛商、是皆我を忘れたる者なり（同・巻四の四）

いずれにせよ、出頭人悲、という連想は、貞享・元禄当時はほぼ定着していたと見てよいだろう。ところで、先掲の波線部④の主体は誰ととったらよいであろうか。④は作者（記録者）と見て間違いない。問題は⑤だ。⑤は作者、および肥後の案内者（あるいは両方）のどちらともとれる。誰とでもとれるということとは、それが家中の者一般の慨嘆であると考えてもよいということでもある。その慨嘆も主君という絶対的な権力の前には沈黙を余儀なくせられ、吐け口のないまま水面下に沈められて、鬱屈する。成り上る者があれば、当然その分だけ割り

を食う者が出る。不満はまたたく間に伝播し、家中は一触即発の状態に陥る。偶発的事件の底流には、このような必然的契機が秘められていたと見てよいであろう。そういった意味で神保五弥氏の次の分析は正しい。

些細なことがらとて突発した事件であるが、そこには平素からの新参出頭の侍と譜代の侍との感情的対立、平和な時代になつての経済に堪能な能吏と、昔気質の武断派の古武士との対立があつたことを、西鶴はまず最初に指摘している(前掲書・二四四頁)。

なるほど、〈悪〉である源五左衛門が、その〈悪〉ゆえに滅びるのは、それでよい。問題は小八郎であり、志半ばにして追剥ぎの刃に倒れる小八郎の母や叔父の六平や下僕宅平等の悲運である。また量的にいつても、この所謂従属的悲劇の部分が事件の発端部分の約五倍を占めている(発端部分三三行・従属的悲劇一五〇行)。

この点について、少し考えてみる必要があるようだ。

父を殺されたとは言え、小八郎一家は恵まれていた。父が「国のために、拔郡忠功」ということで、二十人扶持とはいへ、旧主から養育費が支給されていたからである。だから、敵討ちを申し出た時も、殿の意を受けた老中は「討得たらん時には、本知相違なく下さる」と約束してくれたし、「本望達する迄は、路金入用次第」と、小八郎は祝福して送り出されたのだ。しかし、既に述べたごとくその旅は厳しく、結果は悲惨だった。だが、彼らは単に運が悪かっただけなのであらうか。宗政五十緒氏はこう書いている。

小八郎が仇討に成功しながら、彼は主殺しとして処刑されねばならなかったという結末には、父源五左衛門が今を時めく出頭者として權威を笠に著ての振舞の報復として、一種の因果応報の談理性をそこに認めうるであらう(『武道伝来記』の構造)『西鶴の研究』・二七頁。

確かに、追剥ぎに遭ったことや、父の功績を認めてくれていた太守が死んでしまったことは悲運としか言いようがない。その意味で、『武道伝来記』に因果の磁気を認めた中村幸彦氏の次の評は当を得たものと言える。

因果応報歴然たるさま、宛も後世の瀧沢馬琴の読本を思はしめて、一つもこの理にもれるものがないと云へる程厳然としてある(『西鶴の創作意識とその推移』『近世小説史の研究』・九二頁)。

ただ、注意しておきたいのは小八郎が処刑されることになった直接的な契機は、正否を糺す使者に対し、「源五左衛門、出頭するに任せて、前後に眼見へず。權威己がまゝに、ふるまひしに付て、意趣ふくむの族」が、「當家の扶持人にあらす」と偽りの証言をした点にあつたことである。すなわち、小八郎を悲劇に導いたのは、習俗や機構などではなく、父・源五左衛門が生前に成した〈悪〉なのであつた。それゆえ、本話に関する宗政氏の読み(前掲)は正しい。ただし、それは極めて人間臭い因果なのである。父の放った因果の磁力線の中で懸命にもがく小八郎と、その家族。だが、〈悪〉の遺族による敵討ちは、当人たちがいかに真摯であらうと決して報いられることはないのだ。なぜならそれは「利の剣」(巻八の四)でなかったからである。

一見平穩に見える人間社会。その根源にわだかまる緊張と、それが切れることによって生ずる情念の噴出と争闘。それに伴う当事者の家族や縁者たちの従属的悲劇。係累を持つ者すべてがいつ投げ出されるかも知れない悲劇的空間。こう考えてくると、本話に、習俗や機構の非情さを説んだり、敵討ちの空しさを説むだけでは不十分だということになる。西鶴はここで、敵討ちという行為を通して、人間存在の脆さ、不安さを剔出して見せたものではなかつたらうか。

注目したいのは、時流を読み、敏腕な経済官僚として成り上つた、いかにも当世的な源五左衛門を、〈悪〉として造型していたことだ。つまり、武士の属性を忘れ、時流に巧く乗って小器用に生きる武士が〈悪〉とされ、それに対して、冷たい視線が放たれているのである。〈悪〉と、それによって惹起される悲劇的世界。『武道伝来記』の基本的な構造はここにある。

## 三

浅野晃氏は、『武道伝来記』に収められた話を次の二つに分類している（前掲書四〇頁）。

- (1) 偶然を契機として運命的に発展する悲劇的な話  
 (2) 人間の悪心や奸計を発端として始まり、その悪が天理・天命によって滅ぶという因果関係によって纏められているもの。

また、氏は(2)の所謂「談理の方法」により、西鶴がどのような小説の主題を追求しているかについても言及し、「悪人が天理によって亡ぶという単純な談理の方法によっているもの」から、次第に「きわめて人間的な内容を持った悪が、ふとしたことをきっかけとして生起し、それが周囲の人間達の悲運にかかわって行く姿を印象的に描き上げた作品」へと深化して行くのである。浅野氏の分析は緻密であり、各話をグレード的に見たその見解は、書きながら成長する西鶴像を彷彿させて興味深い。ただ、氏は巻四の三「無分別は見越の木登」を(1)に分類していた。しかし、前節に述べた如く、私は小八郎たちの從属的悲劇に因果の磁力が働いていることを読んだ。私にとって、巻四の三は(2)として分類されるべき作品だったのである。

いずれにしても、『武道伝来記』における「悪」がどのように造型化されているかを検証してみる必要があるようだ。少し表現に即して考えてみよう。まず目につくのは、次の如き類型的な表現である（詳細は後述する）。

○関屋為右衛門（巻一の一）↓近習の侍に、関屋為右衛門といふ者、武の本意をそむき。左京に執心の数通、かよはせける。

○金塚数馬（巻一の四）↓金塚、出頭家老にて、諸事出来しだてに、物毎、子細ら

しく吟味するに。我まゝをふるまひけるを、人みな是を疎みぬ。

○青崎百右衛門（巻二の四）↓青崎百右衛門といへる、御留守番組して、悪人なれば、

○関平（巻四の二）↓関平其後は、世間のよきまゝに、いつとなく奢りて、人皆是をにくみし。殊更、家来に情をかけず、ひとり／＼恨み申ぞ因果なり。

○坪岡藏人（巻五の一）↓出頭家老、坪岡藏人

○十倉新六（巻五の二）↓近習勤めし、十倉新六

○随夢（巻六の二）↓随夢の、年の程七十、古来稀成、御身にして、世をいやましに恥給はず。

○磯辺頼母（巻七の一）↓磯辺頼母とて、勇に色ふかく……

○南江主膳（巻七の三）↓南江主膳と云、出来出頭

○猪谷久四郎（巻八の二）↓猪谷人は、国見求馬、今独りは、猪谷久四郎とて此二人は、大殿の御物あがりにて

○松枝清五郎（巻八の二）↓出頭若ざかりの男、松枝清五郎

○樗木工弥（巻八の三）↓出来出頭の樗木工弥

「出頭」(◎印) と言い、「近習」「御物あがり」(巻一の一・巻五の二・巻八の一)と記し、もつと直截に「悪人」(巻二の四)と言う。これら十数人の人物は、冒頭における紹介の時点で既に「悪」としての役割りを付与されているのである。なるほど、巻一の二「毒薬に箱入の命」には、橋山形部という悪人でない、「出頭」が出る。しかし、西鶴はそこにわざわざこう断っている。「其身更に悪心なく、智仁勇のかねそなはりし人」と。つまり出頭は出頭でも、悪人ではないのだ、とわざわざ読者に念を押さなければならぬほど職能に付せられた言語的イメージが強かったということであり、この例は、私の見解に反しないばかりか、逆証明にも成り得ているのである。因みに、出頭人と富貴とは付合語（『類船集』）。

それでは、他の作品において、〈悪〉はどう表現されているのか、周辺の作品の中に拾ってみよう。

○金井新平(巻二の二) ↓金井新平とて、かくし横目

○細野主膳(巻三の四) ↓近きころはひに召し出されし細野主膳とて、勇みを先として朝夕太刀の柄をならせば、人皆うとみ果てける。

○仁王団助(巻六の三) ↓大事の時邪魔なして、座中これを悪みける。その男は、色黒く髭自慢、日を世間にひけらかし、仁王団助とや、関東にかくれなきもてあまし者なり(以上『男色大鑑』)。

『武道伝来記』との関係がよく問題となる『男色大鑑』であるが、紋切り型に〈悪〉と述べた表現は予想外に少ない。類似の表現は、むしろ前年に出された『本朝二十不孝』(貞享三年)の中に多く見出すことが出来る。

○篠六(巻一の二) ↓替名は篠六と云ふ人、いかに若ければとて、七年このかたに、請け取りし金銀を若女ふたつに、つひやし。

○文太左衛門(巻一の二) ↓この男、大悪人。

○五右衛門(巻二の一) ↓五右衛門とて、勝れたる大力……己が農作を外に無用の武芸をたしなみ……後は欲心おこり……国の盗人の司となり……類に集まる悪人。

○小吟(巻二の二) ↓いまだこのむすめ、九歳の分としてかかる事を、親にすすめけるは、悪人なり

○乙女(巻三の一) ↓この大悪、いづくまでか通がるべし

○仕舞屋殿の八五郎(巻三の二) ↓二親に不孝と取沙汰、する程の事、悪人なり。

○漆屋武太夫(巻三の三) ↓不孝はこれにて、万も知れたる、陸奥、宇津宮と云ふ所に住みし、漆屋武太夫。

○万太郎(巻四の三) ↓不孝第一の悪人(以上『本朝二十不孝』)

まさに、悪人列伝である。なるほど、彼方は衆道を題材とし(『男色大鑑』)、此方は不孝者という名の〈悪〉を集めている(『本朝二十不孝』)のだから、こちらに近似するのは当然だという見方もあるだろう。全くその通りである。ただ、従来『本朝二十不孝』と『武道伝来記』の間に『男色大鑑』と『懐硯』という二作が挿まっているという事実、にこだわり、そんな自明のことが忘れられがちだったのではないだろうか。いかにも、『武道伝来記』には衆道がらみの話も少なくないし(『嵯峨康隆氏の分類によれば』一話(『評論と研究』三九七頁)、後述することく『男色大鑑』との関係は無視できない。ただ、書誌的に見ても『武道伝来記』の成立には問題がありそうであるし、<sup>(註三)</sup> 少くとも創作意識の問題に限っては、『本朝二十不孝』から『武道伝来記』へと考えた方が理解しやすいような気がする(中村幸彦氏「西鶴の創作意識とその推移」参照)。

詳細については、稿を改めるとして、一例だけ挙げておこう。

静かな正月であった。夫婦関係は信仰上の確執というような緊張を孕みながらも、ともかくは平穏だった。折しも、五歳になった子息の袴着の祝いがあり、家内は招待客で賑っていた。宴もたけなわになったそんな時、子供は人々に向って言う、

「私の親は、ともし油売りが、肌に金子八十兩付けしを、この五年あとに切つて、それより手前よくなられし」

と。旧悪を暴露された父親(金太夫)は狂乱し、妻を殺した後自刃する。

『本朝二十不孝』巻三の四「当社の案内申す程をかし」の後半部である。西鶴はそこにこう書いていた、「物に因果あり」と。『新因果物語』と改題されたことでもわかるごとく(宝永七年刊・『弁疑書目録』、『二十不孝』には因果律によって構成されている話が少なくなかった。松田修氏は次のように説明する。

この話を、この五歳の子の不孝譚として受けとめるのは誤りであって、不孝者は金太夫である。彼は篠山での不孝と、鎌倉での不孝と、二重の不孝を犯し、油売り殺しのわが子による発覚は、その応報なのである。『井原西鶴集』二 小学館日本古典文学全集・頭注・二六〇頁。

不孝者は誰か、そんなことは当面どうでもよい。問題は、西鶴がこの一話を以て何を言わんとしたかということだ。因果応報、確かにそれもある。ただ、もしそうだとするならば、なぜその妻も殺されなくてはならないのか。ここに、前節で述べた「悪」への応報と従属的悲劇」という問題の原型がある。私は先ほど「信仰上の確執」と書いた。それは、毎日お燈明をあげる妻を怒った金太夫がその父親の位牌を粉々に打ち砕いたことを指す。彼はなぜ、それほどまでに苛立つのか。単なる信仰心や孝心の問題なのだろうか。ここで、その妻が「形おもはしからぬ」女で、二六・七歳まで縁遠かったと西鶴が書いていたことに注意したい。久離を切られていたとはいえ、「丹波の笹山の町人」で「小判を溜め」、鎌倉の觀光が、イドをして目先も利く筈の金太夫が、この「軒荒れ」た「留宿」の年高な醜女の家になにゆえに婿入りしたのか。それは、独得の臭覚でこの貧家が人知らぬ金を貯えているに違いないと踏んだからではなかったか。彼の苛立ちは、その期待が無残にも裏切られたからに他ならない（油売り殺しという凶行は、この苛立ちに起因すると見ればよいだろうか）。いずれにせよ、金太夫は苛立ち、一方の妻には父の位牌を砕かれた恨みが渦巻いている。そんな脆い緊張関係を辛うじて保つことが出来たのは、子供の存在であった。こう考えて来ると、妻が殺された裏に根強い夫婦間の確執があったことを認めることが可能となってくる。

つまり、超人的な因果応報思想を大枠として、極めて人間臭い話を配したのがこの話であったのだ。また、水面下に沈められた旧悪や確執が些細なことを契機に一挙に噴出し、当人のみならず係累をも破局に導くというその構造は、敵討ちという極めて非日常的で、従属的悲劇を描くに格好なモチーフを有した『武道伝来記』（巻四の三に例をとって既述）へと引き継がれ、深められていくのである。『武道伝来記』において、西鶴が狙ったもの、それは日常に秘められた非日常を

切り取って見せることであり、非日常的状況に際し、人の心がその豊饒な諸相をどう垣間見せるかをえぐり出すことであった。それはまた、彼にとって既に実験済みの方法でもあった（例えば『西鶴諸国ばなし』巻一の三「大晦日はあはぬ算用」など。また、直前には『懷硯』巻二の一「後家に成ぞこなひ」など）。前者の中で彼は、非日常的状況の中に投げ出されても、取り乱さない武士の姿を描き、「座なれたる客のしこなし。彼は武士のつきあい。各別ぞかし」と率直に感心してみせていた。今度はもっと激しい非日常的状況を現出し、その反応ぶりを見ようとするのである。

#### 四

前節まで、「悪」の造型と従属的悲劇の問題について触れてきた。以下は、具体的な検証に入る。

『武道伝来記』を動機と結果（含経過）に二分して考察したのは、暉峻康隆氏であるが（『西鶴―評論と研究』上、とりあえず動機（事件発生の原因）からみてみよう（二六頁の表参照）。

事件発生の原因として一番多いのは「悪口」（九例）である。以下「横恋慕・嫉妬など」色がらみのもの（八例）・「出頭者の横暴」（五例）などと続く。もちろん、この分類はあくまでも便宜的なものであり、実際は一つの事件に様々な原因が絡むことになる（例えば、衆道の恨みから死者の悪口を言う巻一の一例など）。また、同じ「悪口」であっても、「人魚退治」（巻二の四）・「百足退治」（巻七の三）などといった武芸に対する揶揄（巻五の四・巻六の三）もあれば、逆に「竜を恐れる者」（巻三の三）や「殺生石に落とされた鳥を食わない者」（巻五の四）の臆病さを笑うものもあるというように多様であり、地理的な考慮も成されているようである（野田千平氏・前掲書）。いずれにせよ、悪口を契機とする事件が九例、これに口論（巻四の二）・嘲笑（巻八の二）などを加えると一例となり、全編の三分の一を占めることになる。西鶴は言う、

「生命を忘れ。時の喧嘩。口論自分の事に一命を捨てるは。まことある武の道にはあらず」(『武家義理物語』序・貞享五年)

と。寡黙であるべき武士が、軽佻浮薄に流れ多弁となる時、悲劇的世界が現出する。「武道の鑑を描こうとして、武道の顔面を描いてしまった点に、わたしは西鶴文学のもっている逆説性・反語性をみたい」(『西鶴の世界』一四九頁)。こう書いたのは森山重雄氏であった。また、「侍が戦っていたときに、「武士道」はなかった。侍がもはや戦う必要がなくなつてはじめて、「武士道」が生まれた」と書き、その皮肉さを指摘したのは加藤周一氏(『日本文学史序説下』一八四頁)であるが、関ヶ原世代が過ぎ、第二・第三世代に入ると死の緊張感は失われ太平を謳歌する武士も数多く出てくるようになるのである。

○「巻六の三」毒酒を請太刀の身」

彌州では若殿の代となり、「御患」みかたがたそれぞれの「武芸自慢」を自己申告させることになる。一見「生ぬる」そんな熊井五助の申告数が多いのを外山白右衛門、坂野用助、乙息隠之進といった傍輩が嘘に違いないと笑う。五助は武芸を実証した後、三人に果たし状を出す。「死ぬ事はすかぬ」と、三人は降参するが、不安になる。また三人の悪評も立つようになつたこともあり仲直りを装って五助を誘ひ、これを毒殺してしまう。しかし、その後三人で会合する時瀧之進が雷を怖れたのを二人が笑つたことから口論となり、互いの悪業を洩らした瀧之進は討たれる。瀧之進の一子角之丞は父の敵を討つが、今度は逆に五助の子息五七郎と戦ふこととなる。五七郎は角之丞が風呂から出るまで待ち、決闘となる。五七郎の刀の目釘が外れ、そこに付け込んで討とうとした角之丞は、母にたしなめられる。準備を整えた五七郎は角之丞を討つ。

実力は伴わないにも拘らず、ブライドばかり高い武士が増える。彼らは武芸は苦手でも、自分への悪評や悪口を極端に嫌う。角之丞の悲劇は、父親のそんな極めて同時代的な悪癖に胚胎していた。分析をはじめる前に、似たような話があるので挙げておこう。

天正十六年、加藤清正に肥後が与えられ、その使者として福岡正則方から竹倉新左衛門が

上洛した時、取次に出た石倉清六の袴の腰がねちれているのを見て石田小兵衛と松沢三四郎は笑う。翌日、そのことをめぐって清六と小兵衛は切り合う。そこへ、「今の世の賢人」網代民部が駆けつけ仲裁。その場は納まるが、小兵衛と三四郎に悪評が立つ。そこで二人は相談し、清六に酒を振舞ひ、殺す。そして遁走。その後、天正十八年三月、秀吉の北条攻めで駿府に同行した清六の弟清八は草薙宮で祢宜となつていた小兵衛を見つけ、三四郎のことを聞くと、大井川で転落死したというので、小兵衛の首を落とす(『武道一覽』七「袴の腰ぬけ」貞享四年五月)。

『武道伝来記』との関係が、とかく問題にされる『武道一覽』中の一話である。同一素材なのかどうかは別として、両書の特質や著者(『武道一覽』の作者は、北条団水と考証されている(宗政五十緒氏「北条団水年譜」))の興味の持ち方を考える上で好都合だと思ふので比較してみる。まず、『武道一覽』(巻七)の特質は、次の四点に集約できる。(1)年代や人名がはつきりしている(歴史上著名な人物が多く出るということもある)。(2)嘲笑されて争いとなることや悪評が立ち毒殺するなどの点で両者は似ている。(3)敵討ちの経過についての叙述が簡潔である。(4)事実を伝えることに専らで、登場人物の心理状態にまで筆を及ぼすことが少ない。

『武道伝来記』で特に目立つのは、三人の傍輩(特に瀧之進)を徹底した臆病者として造型している点であろう。彼は武芸を捨てても、依然として武士だと思つてゐるし、武士としての誇りは捨てられない。精神と実体のアンバランス。悲劇の因のすべてはここに胚胎していた。既に記した如く西鶴は、極めて当世的な武士気質であるそれを「悪」として造型し、それが生み出す悲劇的世界の形成へと向かつたのである。

ところで、瀧之進の一子角之丞も本望を遂げることは出来なかつた。なぜか。よく義理をわきまえていたということと夫と対照的な妻は、その理由についてよく説明している。

「誠に、我子ながらも、心の剛なる事は、中々御自分に、おとる者にあらず。され共、父瀧之進、武士の本意に背きたる冥理の程、弓矢神にも見はなされし、天罰のがれずして、角之丞に酬て、只今御手にかゝりたり」

長さ(行数)	巻 名	総丁数(挿絵)	柱	各章 見出し番号・枠(ナン)	悪役の設定と動機 ○印は悪役有	国	討手	成否	結 末	従 材
182	〔巻四の三〕	8 (1)	鑑	(○)	○ 出頭者の横暴	肥 後	悪側	成功	処 刑	☆
	〔六の三〕	8 (1)			○ 悪 口	卯 州	両方	善側	草 庵 へ	☆
143	〔三の二〕	6 (半)			○ ※不 明	豊 後	善側	成	帰 国	
140.5	〔一の三〕	6.5 (1)	(鑑)		○ 悪 口	陸 奥			相 討	★ ○
130	〔一の一〕	6 (1)			○ ※悪 口	江 州	善	成	逃 亡	○
	〔八の一〕	6 (1)			(○) 転倒を笑う	丹 波 (善)	成	帰国/出家	★ ◎	
129.5	〔一の二〕	5.5 (半)	(鑑)		(○) ※ (嫉妬による毒殺)	奥 州 (悪)	否	斬 殺	★	
	〔四の一〕	6 (1)	鑑	(○)	口 論	駿 河			出 家	◎
	〔七の一〕	6 (1)	鑑	『二二』	(○) 横恋慕(女色)	日 向	善	成	斬 死	☆ ◎
129	〔二の三〕	6 (1)		(○)	水 掛 祝	徳 島		成	出 家	○
128	〔五の二〕	5.5 (半)	(鑑)		○ ※横恋慕(衆道)	沓 岐	善	成	自 殺	
127.5	〔一の四〕	5.5 (半)	(鑑)		○ 出頭者の横暴	播 州	悪	否	斬 死	☆
117	〔八の三〕	5.5 (1)			○ 出頭者の横暴	播 州	悪	否	斬 死	☆
115	〔五の一〕	5.5 (1)	(鑑)		○ 出頭者の横暴	大 和	善	成	出 家	○
104	〔二の一〕	5 (1)		(○)	○ ※横恋慕(女)	安 芸	善	成	帰 国	
	〔三の四〕	4.5 (半)	(鑑)		○ ※横恋慕(衆)	作 州	善	成	自殺/出家	★
	〔五の三〕	5 (1)			礼 儀	佐 渡			相対死他	★ ○
	〔六の四〕	4.5 (半)			※主 命	越 国			相対死他	★ ○
103.5	〔七の三〕	5 (1)	鑑	『二二』	○ 悪 口	薩 摩	悪			
103	〔六の一〕	5 (1)			(○) 嫉妬によるにせ文	京 都	善	成	自 殺	☆ ◎
100	〔二の二〕	4.5 (半)		(○)	仲 人 口	肥 後		成	出 家	
91	〔三の一〕	4.5 (1)			○ ※悪 口	出 羽	善	成	帰 国	
	〔六の二〕	4 (半)			○ 弓自慢と誤射	但 馬	両		相 討	☆
90.5	〔二の四〕	4.5 (1)		(○)	○ 悪 口	松 前	善	成	再 興	○
	〔七の二〕	4 (1)	鑑		○ ※横恋慕(衆)	(仙 台)			自殺他	★ ◎
89	〔三の三〕	4.5 (1)			○ ※悪 口	予 州 (善)			相 討	
88.5	〔四の二〕	4 (半)	鑑	(○)	○ 手柄争い	嶋 原	善	成	再 興	★
	〔八の二〕	4 (半)			○ ※出頭者の横暴	小田原 (善)	成			
78	〔五の四〕	3.5 (半)			(○) 悪 口	能 登		成		○
	〔七の四〕	3.5 (半)	鑑		若 党の無礼	参 州			出 家	◎
	〔八の四〕	3.5 (半)			○ 悪 口	下 野	善	成	帰 国	◎
73.5	〔四の四〕	3.5 (半)	鑑	(○)	嫉 妬	伊 勢		成		

## 〈凡例〉

- 長さ・行数は、石郷岡恵子氏「西鶴本書誌・I」(『硝子』2号)を参考とした。
- 書誌的な問題については、野田千平氏・西島孜哉氏等の研究(別掲)を参照した。
- 「鑑」は柱刻に「武道鑑」とあるもの。空欄は「武道」。(鑑)は両者の混合。
- ※衆道の絡みあり。
- ☆は従属的悲劇。★はそれに準ずるもの。
- 素材欄の「◎」は、前田金五郎氏らの研究(別掲)でモデルと認め得るもの。「○」は広い意味での素材と考えられるもの。

父の〈悪〉の応報として、瀧之進は非業の最期を遂げたというのだ。〈悪〉側の係累の営為は報いられない。西鶴ここにおいても、その構図を崩そうとはしなかった。『武道伝来記』の一般的特徴は、動機の部分よりも事件の結果のほうに、重点がおかれていることである。こういうことは、事件の当事者よりも、その責任を負わされる妻子の方に、説話の中心があることを示している（森山重雄氏・前掲書・一四八頁）という。まさしく、然り。妻子の運命を詳述していけば、当然のことながら長編化する。前掲の表（二六頁）で分る如く、この巻が先掲巻四の三と並び、『武道伝来記』きつての長編だということも合点がいくであろう。なるほど、この話における〈悪〉の造型は充分だったとはいえない。ただ、少なくともその〈悪〉がどのような悲劇的世界を招来し、形成していくかということについての志向は垣間見られるのである。

## 五

悲劇の波及。時として、それは〈善〉側〈悪〉側を問わず思いがけない人々をも巻きこんでいくこととなる。西鶴は、平和そのものの家庭を襲うその波を見逃しはしなかった。どんな悲劇的な世界が形成されているのか、以下みてみよう。

水無瀬の里で好きな男と楽しく暮らす小吟（巻六の一「女の作れる男文字」）や、幸せな結婚をした増井兵蔵妻（巻七の一「我が命の早使」）も、悲劇に巻き込まれた一人だ。暴君という名の〈悪〉に姉を殺された彼女たちは、自らの使命を任じ夫に別れを告げた後、敵を討つ。しかし、事が成就した後小吟は自害し、彼女に去られた男は焦がれ死をする。また増井兵蔵妻は夫と共に壮絶な打ち死を遂げることになるのだ。

『武道伝来記』における女性の活躍ぶりに着目したのは、浮橋康彦氏であるが（『錯綜する運命の記録・武道伝来記』『国文学』昭和五四年六月・五四頁）、確かに、従属者としての女性の動きが際立っている。なぜなら、女性の場合遺族という名の被

害者となるケースが多いし、「うき世に、武士の妻女程、定めなきものはなし」（巻二の三）という如く、家長（もしくは、それに準ずる者）亡きあと、一家の精神的支柱として、敵討ちを通しての御家再興という難局に立ち向かわねばならぬことがどうしても多くなるからである。

それにしても、注目したいのは女性の方がむしろ、武士の鑑と呼ぶに相応しく造型されていることである。瀧之進母（巻六の三）については既に述べたが、他にも人魚を射止めたことを傍輩に疑われ悶死した父の敵を討った中堂金内の娘と妾（巻二の四「命とらるゝ人魚の海」）、恋人を手引きして敵を討たせようとする女（巻八の一「野机の煙くらべ」）など、多くの例が挙げられる。特に後者（巻八の一）の場合は自ら悲劇的世界を造り上げ、それに殉じているだけに潔さが際立っている。つまり、彼女は父の敵を狙う虎之助を手助けするために敵方に奉公するが、敵との間に子を生してしまう。虎之助との約束と自分（及びその子）の幸せ、いわば義理と人情の板挟みの中で葛藤し、遂には前者を選びとり、子を道連れとしながら自殺することとなるのである。

敵討ちという極めて非日常的な状況を仮構し、そこに人々を投げ込んで、反応の諸相を見ろという西鶴の方法は、こうして様々な人心を汲み上げることに成功する。

本懐達成というゴールを目ざしながら、曲折し、様々に繰り広げられる人間ドラマ。西鶴は鋭くそれを見詰めて行く。遊女町の些細な口論のため、傍輩に夫を殺された専左衛門後家の場合も悲惨だ（巻四の一「大夫格子に立名の男」）。つまり、一緒に敵討ちをしてくれる筈の義弟が言い寄って来たからである。「天命そむき、道ならぬ御事」と、これを拒んだ彼女は、なおもしつこく迫る義弟を刺殺し、自らも命を断つに至る。大望を持ちながら、思いがけなくも身内の中に萌した〈悪〉の前に挫折していくというのがこの話であり、美しさゆえの悲劇を描き出すのである。

それでも、専左衛門後家の場合、その遺志を子の専太郎が継いでくれたから救いがあった。もっと不運な例もあるのだ。

○〈巻八の三「幡州の浦浪皆婦り打」〉

信濃国の出来出頭樗木工弥は、小湊井右衛門が先口と知りながらも馬を欲し、決闘となつて井右衛門に討たれる。木工弥の縁者は敵を狙うこととなるが、娘夫婦は口論の末に死に、次男の宇助は奉公先で喧嘩をして手討ちに遭い、従弟の北右衛門は抱瘡で死に、やつと生き残つた長男の孫七さえも井右衛門のために返り討ちにされてしまう。

討ち手のことごとくが死に絶え、敵討ちは全くの徒勞に終る。しかし、西鶴はそこをこう結んだ。「以上四人の敵、今は壹人も残らず絶て、井右衛門が手柄、隠れなし、世にはかゝる例も有物かは」と。ここには、敵討ちという美名の陰に倒れて逝つた人々に対する何らの同情や、感慨もない。ただ、「かゝる例も有物かは」と、その珍奇さに率直な驚きを見せているだけなのである。なぜか。ここで想起すべきは、被害者の木工弥が出来出頭、という名の〈悪〉として造型されていたことだ。つまり、嫉妬に基づく殺人を犯し処刑された小梅の敵を討とうとした弟久蔵(巻二の二「毒薬は箱入の命」)が、むしろ「悪しみ深かりき」と評されていたという例を挙げるまでもなく、因果の磁力の中、〈悪〉側の敵討ちは依然として報いられることがないのである。百足退治をした沖浪大助を、「田原藤太」とからかったことにより殺された出来出頭の南江主膳(巻七の三「新田原藤太」)。その敵討ちに出かけた子息善太郎はそれでもまだよかった。身替りとはいえ、大助の親不孝な息子を討つことが出来たのだから。だが、次の例の場合すこぶる不毛だと言わざるを得ない。

○〈巻六の二「神木の咎めは弓矢八幡」〉

但馬出石の里、半弓自慢の葉田与七郎は、誤つて傍輩大石半九郎を射殺してしまったことから、仲間の久志小左衛門と口論となり、斬られる。その小左衛門も、同道の小伴新四郎に討たれる。半九郎子息半三郎、与七郎の弟分松淵時之助、小左衛門一子・沢之助の三人は新四郎を敵と見て、これを討つために揃つて出かける。やつとのことで敵と出合うが真相を告げられ、時之助と半九郎は戦いの後差し交え、沢之助も新四郎を討つた後、新四郎の娘に討たれる。新四郎の娘は、その後尼となつて七人の菩提を葬う。

敵を探すために一致協力して行動した仲間だった。その仲間こそが敵の縁者だ

つたとは、何たる皮肉だろうか。しかし、翻つて考えてみるなら、そんな運命の皮肉こそが、人間社会の実相であるとも言い得るし、そういった意味で本話は、武士という階級を超えた広がりを持つとも言えるだろう(たとえば運命の皮肉さを描いたものとして『懷硯』巻一の一四「案内しつてむかしの寝所」などが挙げられる)。

ところで、この話に〈悪〉らしい〈悪〉はいない。誤射という偶然が引き起こした事件であり、正に、「悲運の中で奔弄される人間の運命的な展開とその悲劇性を、偶発的な契機を重視する方法によって主題化することに成功している作品」(義野晃氏・前掲書・三九頁)なのであるが、西鶴がそこに「怨、神罰の顯はれ」と書いていたことを忘れてはならない。〈悪〉の造型とまでは至っていないにしても、その偶発的契機の背後に、葉田与七郎という若侍の弓術への慢心という必然的契機が横たわっていたのである。

一方、心ならずも犯した〈悪〉に基づく因果律に導かれ、自分の前にはからずも招来した運命の皮肉と対峙し、葛藤するのは赤西専八である(巻六の一四「碓引き垣生の琴」)。彼は曾て上意により、不本意ながらも出崎新五平を討つたことがあった。時はめぐり、皮肉にもその遺児と念友関係に入ってしまったのだ。敵と知り、万策尽きた二人は相対死をし、母も後を追うこととなる。ここの主題は、「人間の行衛はしれざる者」に尽きている。たとえ主命からであるとは言え、自分の犯した行為は、自分で償わねばならない。それに応える念友庄之介の武士らしい心情。母の身の処し方も含め、潔い態度が美学として表現されているのである。

宮越十太郎は、弟が高給の侍の下男から恥辱をうけたことに激して凶行に走つた(巻一の三「噂(もつと)といふ俄正月」)。なるほど、武士としての対面を保ち続けるのは難しい。しかし、いかにも武士らしい身の処し方が認められるものもある。例えば、不仲であったにも拘らず、出頭家老を討つて逃げた安川権之進の妻子をかくまった細井金太夫(巻一の一四「内儀の利発は替た姿」)。また、誤解に基づく犯行だったが敵の子に討たれてやろうとする篠原文助(巻二の三「身軀破る落書(おとし)の団」)や青柳十蔵(巻四の一「大夫格子に立名の男」)がそうだ。そして、不幸にも「鎧をはず

しました」という相手の言葉が聞こえなかったがために争闘となり、国遠の後、身を大切にして喧嘩相手をひたすら待ち続けた椿井民部(巻五の三「不耐心懸の早馬」)。彼らの身の処し方には、武士本来の美学を認めることができる。とりわけ青柳十蔵の態度は潔い。つまり、遊女町での口論から傍輩を討ってしまったことを後悔した彼は、その子の専太郎に深く討たれるべく、刀の刃も潰し、目釘竹も外して待っていたが、運なく病死してしまふ。やっとのことで到着した専太郎が死骸を掘り起こすと、死体は眼を開き笑い顔となったのである。西鶴は「ためしなき男なり」と率直に感心している。

因みに、この話は乞食の持つ羽織によって犯人が割れるという一種の探偵小説的構成を持っているが、以たような構成を持つものもある。例えば、勝浦係之丞の犯行は、妻の告白によって明らかに(巻四の四「踊の中の似世姿」)。これに対して、成敗しようとした若党の告白のために旧悪が曝露され、被害者の兄の茂左衛門らに討たれたのが矢切団平である(巻四の二「誰捨子の仕合」)。仇討ち代理人となった捨子(茂吉)は名跡を継ぐ幸運を得るが、西鶴はその裏に若党九市郎の処刑と、彼の告白を茂左衛門に伝えた久米の自害という悲恋を配して、悲喜の諸相を示すことも忘れなかった。

下男といえ、家来のちよとした粗忽さが大きな事件を引き起こすという話もある。

#### ○〈巻七の四「愁の中へ樽肴」〉

三河国、小見山惣左衛門の若党与四兵衛は生来の粗忽さから、祝儀の家と不祝儀の家の口上を逆にしてしまふ。与四兵衛は成敗されることとなるが逆に惣左衛門に傷を負わせ、隣の里鐘郷左衛門方に駆け込む。両家争い、与四兵衛と惣左衛門は討たれ、郷左衛門は切腹する。惣左衛門の子専太郎は、その場を逃げた郷左衛門の子弥七を敵と狙うが、彼が討手の到着を待っていたという心情が分り、二人は比翼の契りをした後、発心して父親の菩提を弔う。

前田金五郎氏によれば、本話は『犬著聞集』巻十「手討仕損ずる事」に拠るという(前掲書)。ただ他にも似たような話があるので、次に挙げておこう。

八月十五夜、月見の宴。荻田喜平太が仲間を集めて宴会の時、密柑の吸物が一つ足りない。その間に合わせをしたのを料理人戸右衛門はとがめられる。次回は逆に主人のものだけ良くする。それを喜平太は怒り斬るが、戸右衛門は木枚十郎右衛門方へ駆け込む。木枚が渡さないの、喜平太は医者の方を買収、戸右衛門が在所で養生する日付を聞きつけ若党に襲わせるが返り討ちに合い、喜平太は閉門させられ切腹。『武道伝合大鑑』一「密柑一つ七人の敵」宝永六

下男の粗忽さと、それを咎める主人。主人の成敗から逃走する下男。隣家の保護と、そのための確執。両者はよく似ている。ただ後者の主眼は最後の「密柑ひとつ六七人の命を取たるこそ不思議」という点にあり、極めて重いものが極めて軽いものによって失われるという皮肉が利いている。そんな点で話としては、むしろこちらの方が面白いとも言える。ただ、『武道伝来記』の主眼は討手である専太郎が弥七の、「潔清、振舞」に感動し、遺恨を捨て念友となるという結末にあり、敵討話が衆道話へと収斂して行く様相が垣間見られる。なるほど、『武道伝来記』には、巻一の一などの如く、本来衆道話であったようなものを無理矢理に敵討話として仕立てたかと思わせるものもあって、『男色大鑑』との関係の深さは無視出来ない。ただ、両者には微妙な違いもある。次節でそれを見よう。

## 六

#### ○〈男色大鑑〉巻二の二「傘持ってもぬるる身」

堀越左近という侍が雨宿りしていると、傘を差し出してくれた美少年がいる。傘を持てないながらも濡れ身となっている理由を聞くと、その少年は長坂小輪と名乗り、母の手業の傘ゆえもつたいなく「天のとがめも恐ろし」いからという。その心情に打たれた左近の仲介で、小輪は仕官が叶う。拔群の美貌で彼は忽ちのうちに殿のお気に入りとなるが、「御威勢にしたがふ事、衆道の誠にはあらず」と殿の要求を拒む。ある時、小輪は「一眼の入道」に化けた狸を退治するが、親を殺された子狸は、彼に近いうちにその報いが来るだろうという謎の言葉を残して消える。間もなく小輪は、家中の神尾惣八郎と衆道の契りを結ぶ。しかし、それを「かくし横目」の金井新平に見咎められる。早速、殿の詮議があるが、小輪は頑として相手の名を明かさず、左の手・右の手・首の順で斬られ無残な最期を遂げる。一方の惣八郎は「野良犬の生まれ替り」などと噂されるが、翌年の春、新平を討った後、小輪の墓

の前で自害する。

暉峻康隆氏は、右の一話を「西鶴の唯美主義的傾向の頂點を示す作品」(三八二頁)と評す一方で、『武道伝来記』への糸を次の如く紡ぎ出している。

「衆持でもぬるゝ身」においては、若衆を討たれた念者の復讐を描いてゐる。義理と意気地と任侠の上に花吹く悲壮なる武家の衆道美を描かうとしてもとめた題材の中に、おのづからふくまれてゐた復讐であつたにちがひないのであるが、復讐の心理を理解することはできても、死に報ゆるに死をもつてする武家社会の復讐の壮烈さに対しては、エトランゼにすぎなかつた町人作家西鶴の貪慾な説話的興味が蠢動したのは当然といはなければならぬ」(『西鶴——評論と研究』上・三九四頁)。

『男色大鑑』にあつては、本来副次的であつた主題が、成長発展しながら『武道伝来記』が成つたというのであるが、どうか。例えば、『男色大鑑』には次の如き、型にはまつた雅文が目立つが、暉峻氏自身も認める如く『武道伝来記』にそれは少ない。その事実を単に「諸国咄的な発想の上にたつた強い即物的精神」(江本裕氏「西鶴武家物についての一考察」『日本文学研究資料叢書・西鶴』・一七三頁)の産物と解するだけでよいのであろうか。

わざとならぬ顔はせ、遠山に見初むる月のごとし。髪は声なき宿鳥にひとしく。芙蓉の臉じり、鶯舌の声音、極すなほなる心ざし(小論の美しさに対する形容)

いずれにせよ問題は、『男色大鑑』の中にレットルをはりかへさへすればただちに『武道伝来記』に編入してしかるべき作品がある」(暉峻康隆氏・前掲書・三九七頁)というように、両者の関係を単純に言い切つていいかということである。

『武道伝来記』と比較する前に先掲の話の特徴を次の三点に要約しておこう。

- (1) 主題は絶対的な權威をも恐れない小論の精神美を描くところにあり、物八郎の敵討ちはその主題を補完する副次的な役割りしか担つていないこと。
- (2) 小論の化物退治が挿入され、彼の悲劇は狸殺しへの応報という構成がとられてい

- (3) 〈悪〉の造型が単純で、かくし横目の金井新平にすべての責を負わせて、殿の残虐行為は何らの報いも受けていないこと。
- これに対し、『武道伝来記』はどうか。

○〈巻八の二「惜や前髪箱根山嵐」〉

小田原の城下で出頭若さ、かりの男・松枝清五郎は、念友関係にある水際岸之助が自分の許可を得ずに元服したことを怒り、岸之助とその父岸右衛門、および元服の使者に立つた与七右衛門とを殺し、逃げようとするが、与七右衛門の若党の龜右衛門に斬られる。

衆道絡みとはいへ、内容は出頭という〈悪〉の横暴ぶりを描いた巻五の一(枕に残る束縛ひ)などと同工の話だ。ただ、清五郎の跳梁ぶりの描写が細やかで、御家のため何とか岸之助を元服させたい水際一族が、その反対に合つて当惑する様子などが好対照を見せている。類型的とはいへ、〈悪〉は金井新平(先掲『男色大鑑』より成長し意図的に造型されているといえるだろう。また、神尾物八郎(先掲『同』)のごとく、念者の敵を討つ話としては(A)巻三の一「人指ゆびが三百石」、(B)巻三の四「初茸狩は恋草の種」、(C)巻五の二「吟味は奥嶋の袴」などがある。

つまり、(A)は「武士に残ましき心底」の〈悪〉藤村佐太右衛門が切指についての悪口を言うのに抗議し、返り討ちに遭つた念者(駒谷木工左衛門)の敵を龜石仁七郎が取る話であり、(B)は竹倉伴蔵の横恋慕のために念者(能登屋藤内)を失つた沼菅半之丞が敵を討つ話である。また、(C)で糸鹿梅之助に討たれる近習、十倉新六に至ると、その〈悪〉は衆道で冷淡にされたという個人的な恨みに発しながらも、若殿の威を借りたり、女中頭の手を借りて、袴を奪い相手の男(村芝与十郎)を畏にかけ刑死させるなど、陰湿になつてくる。

なお、母に横恋慕した従兄弟(藤沢甚平)のために父を殺された村之助を助けて敵を討たせた、亡父の念友大谷勘内(巻二の「思ひ入吹女尺八」)も、念者の敵討であり、兄者の敵を弟分が討つという点と、〈悪〉は〈悪〉として明確に造型化され、成敗されている点に、『男色大鑑』(巻二の二)との違いが認められる。

因みに、少し趣きの変つたものとして、追腹を切つた死者(左京)に対し衆道の

恨みから悪口を言って、その弟たちに討たれた閑屋為右衛門（巻二の一）「心底を弾琵琶の海」の話や、暴力で閑係を迫る「不義」者（葉田川九郎治）を返り討ちにしたことから、四十五人以上戦い二十七人の討死という大騒動を招く話（巻七の二）「若衆盛は宮城野の萩」もある。後者の場合、「悪」の設定も変り、衆道咄はほとんど沈められ、焦点は自分の処遇をめぐるの綱引きに耐えられず、葛藤の末自殺するという萩山勝之介の心情を描写する方向に移動している。いずれにせよ、『男色大鑑』と『武道伝来記』とは素材を同じくするとはいえず、「悪」の扱いや西鶴の筆の進め方などに於て、大きく違っている。<sup>（註五）</sup>それは、西鶴が『武道伝来記』において、日常生活の中に潜む「悪」によって喚起される敵討ちという非日常的行為を通して、当世の豊饒な人間模様を描こうとしていたからに他ならない。そのことはまた、雅文を用いなかったという表記行為とも複雑に絡んでくるのであるが、今は深入りしない。

#### ○「巻三の二」按摩とらする化物屋敷

豊後の府内、梶田奥右衛門は化物屋敷の狸を退治し高名をとる。しかし、兄が討たれたの知らせを受け、敵の戸塚宇右衛門を探しに出るが、その途中松山で大津兵之助と兄弟の契りを成す。兵之助は宇右衛門に手首を切られながらも、奥右衛門を助け見事本懐を遂げさせる。

先掲(2)の問題と関連のある化物退治がここに出ている。この特徴は、長編にも拘らず「悪」であるべき戸塚宇右衛門の性格についての描写がほとんどないことと、武辺話と衆道話との結合が見られること、念友が協力して敵を討っていること（巻二の二「毒薬は箱入の命」などもこの類）の三点に要約できる。『武道伝来記』に当世の諸悪の集積を見、その「悪」によって導き出される（悲劇を中心とした）豊饒な人間模様を読み込んで行こうとする筆者にとって、本話の如く「悪」の描き方が不十分な例が存在することは、あまり好都合とはいえない。知らんぷりをきめ込むか、例外もあると言つてとほければよいのであろうが、そうもいかなない。少し考えてみる。他の作品から似たような話を挙げてみよう。

寛文年中、江戸牛込赤木明神の近所。少身衆の明屋敷に化物が出るとの噂。御茶坊主の珍可・竹若久太夫・松嶋文太夫・川田孫平・窪田平兵衛らで行つてみることになる。窪田は風邪気味で気が進まなかったが出かける。皆が寝入った時、見越入道が出て窪田と争う。以後、彼は大病病となり一四、五日寝込む。化物と戦つたということを皆に信ぜず、悪口を言い触らす。窪田は無念ながらも、本復を待ち続け、本復後、化物（黒猫）を退治し、その首を持って皆を討ち、自分も討たれる。

〔巻二の一〕病氣に死なぬ終の太刀風〔新武道伝来記〕宝永二（一七〇五）年

化物屋敷に乗り込み、それを退けるといふ点で両者は共通している。だが、奥右衛門は化物を退治したのみならず、それを従わせ肩を揉ませる等といった遊びがあるのに対し、窪田の戦いは深刻であり結末も悲惨だ（この点は『男色大鑑』巻二の二も同じ）。西鶴は「按摩とらする」において、こう書いていた。「衆道の情、武道のはまれ、人の鑑……武士の本意、かくあらまほしき事なり」と。前半は化物咄を通して奥右衛門の「何事もおちさせ給はぬ」古武士然とした反、当代的武士ぶりを描き、後半にはその心情に應える兵之助の心情という衆道の美学を配して、それを顕彰したのがここなのだ。つまり、武断派の奥右衛門の勝利は、とりも直さず当世の臆病な軟弱武士へのアンチテーゼともなり得ているのである。

さて、『新武道伝来記』（巻二の一）に於ては武辺と臆病さをめぐる仲間の悪口が窪田を凶行に走らせたのであるが、同じ動機で、三十二人も入り乱れて争うことになった話として、巻五の四「火燵もありく四足の庭」がある。これは、百物語の際大の入った火燵が動いたのを、誇らしく仕留めた友枝為右衛門に対し、傍輩の篠村三九郎が揶揄したことに端を発しているのだが、龍を恐がった父の行為を臆病と噂されたことから決闘となり、討ち死にをする成川瀧之助のような者もいる（巻三の三「大地も世に有人が見た様」）。また、臆病という点では、那須の殺生石での落鳥を嫌って食べることを避けた熊川茂七郎もその一人である（巻八の四「行水でしるゝ人の身の程」）。もちろん、ここでは悪口を言う高砂丹兵衛が「悪」として造型されているのであるが、言外にはそれら武士たちの臆病さや脆弱さへの批判が籠められており、父親のそうした性癖ゆえに敵討ちに駆り出されなければならない子供たちへの同情まで読み込むことも可能なのである。

ともかく、奥右衛門を武断派とするなら、これらの武士たちはすべて当世派ということになる。前者に軍配を上げたところに、西鶴の姿勢が象徴されているように思える。しかし、ことはそれほど単純でない。次の例を見ておこう。

○〈巻二の二〉「見ぬ人員に膏の無分別」

玄春後家、仲人口で善連寺外記の妹おたねを福崎軍平に縁付ける。軍平は、おたねがあまりにも醜女なので怒り、実家に帰す。おたねは自害。外記は怒って軍平方に来るが返り討ちに合い、軍平は妙春をも討ち通走。外記の弟八九郎は、熊野参詣の途中仲間の和田林八と争うところ外記の霊と会い、二人で力を合わせて軍平を討つ。その際、林八が討たれたこともあり、八九郎は発心。

ここに〈悪〉はない。強いて挙げるなら、当世の仲人口を理解できず、「今の世の中は、かうした事が勝手づく、女房がよいとて、御身牀のたよりにはなりませぬ」と説得され、特別持参金として貳百両を差し出されても怒り出すような軍平のかたくなな武士気質なのである。彼は「仁牀すぐれて、武芸に達し」ていた。しかし、あまりにも当世を知らな過ぎ、浮世離れ仕過ぎていた。西鶴は当世化の波にものまらず武士本来の属性を守り通す武士を賛美する傍ら、柔軟性を欠いた武士気質をも批判し、相対化するのである。

七

西鶴のごとき利口者の町人が、わざわざ武家のことを書くというのだから、何か腹に一つもつなくて筆をとるはずがない。それこそ転合でなくて何であるう。このことの庶民的意思こそ、これまでの一切の武家物の研究者が見落してきた点なのである（『近世の庶民文化』・二一四頁）。

こう書いて、歴史学分野から挑発したのは、高尾一彦氏であった。氏は『武道伝来記』中の各話は「仇討を讃美するもの」と「仇討の不合理無意味さを曝露する型」の二つに大別出来ると言い、そこに「庶民的政治批判意識」を読みとつ

た。そして、前者に於て「極悪人の設定と罵言」という興味深い視点を導入し、専ら「侍畜生」という言葉にこだわり、こう考察する。

「侍畜生」の語が生きるような極悪の武士を登場させて、それによって具体的な階級悪の実相を提出し、これが討ちとられることで仇討の讃美に結果するということのようにある。

まさに、支配階級の侍のなかにこそ、畜生の罵言に値する極悪人が存在するという考え方、そしてそれを作品に登場させること自身が、すでに反封建的批判の意識を示している（前掲書・二二四頁から二二五頁）。

なるほど、大胆な指摘である。しかし、本当にそうか。『武道伝来記』の中に「極悪の武士」など、それほど描かれていたであらうか。それより何より、小説中の罵言のいちいちに作者の感情移入があると考えたら、巻き舌で成される江戸ッ子の悪態や口喧嘩のすべてに御政道批判を読まなければならぬことになる。既に考察したごとく、『武道伝来記』における〈悪〉は、それほど激しいものではなく、むしろ類型的だ。西鶴が、これらの悪人をどう見ていたか、先に一部示したが、もっと具体的に表現をみよう（括弧内は会話の中に出るもの。「」は必ずしも〈悪〉といえないもの）。

○〈巻一の二〉「閑屋為右衛門（近習の侍）」↓「武の本意そむき」「人倫にはあらず」「天命しらず」

○〈巻一の二〉「小梅（女中）」↓「（我になりて）是をにくまぬ人はなし」「仏神是をうけ給はず」「其身をとがめ給ふ」「悪事をたくみ」「因果をはのがれず」（第九蔵）↓「悪しみ深かりき」

○〈巻一の三〉「（岩国善太夫の奉公人達）」↓「三千石の威勢を見せて、人立の中に、遠慮もなく割入」

○〈巻一の四〉「金塚数馬（出頭家老）」↓「諸事出来しだて」「勝にのつて我まゝ」「人みな是を疎みぬ」

○〈巻二の一〉「藤沢基平（従兄弟）」↓「骨骸たくましく、殊に大力」

○〈巻二の二〉「（福崎軍平（御使番）」↓「仁牀すぐれて」「武芸に達し」↓「億病風に引籠り」「むかしの勇力出ず」

○〈巻二の三〉「篠原文助（養子）」↓なし

- 「巻二の四」青崎白石衛門（御留主番組）↓「悪人」「我まゝ」「日比に悪みある」
- 「巻三の一」藤村佐太右衛門（傍輩）↓「酒に暮し」「武士に浅ましき心底」「内海丹右衛門（宮津の家中）↓「道理をわきまへぬ武士」
- 「巻三の二」戸塚宇右衛門↓なし
- 「巻三の三」久米田新平（家中の者）↓「若き衆の悪口」
- 「巻三の四」竹倉伴藏（国の守を望し）↓「此道を好る、やき男」「竹倉伴藏がにくき仕業」
- 「巻四の一」青柳十藏（しのびの友）↓「うき世ぐるひ」「無用の口論」・青柳専兵衛（被害者の弟）↓「武士の義理をもちへり見ず」「人の聞え、世の思はくをもちまはねば」「天命そむき」
- 「巻四の二」矢切団平（傍輩）↓「いつとなく寄りて、人皆是を、にくみし」「家来ひとりとく、恨み申ぞ因果なり」「是治生」「天命のくるゝ所なく、団平非道あらはれかゝれば」「悪人に極れば」・千本勝五左衛門（歩横目）↓「物になれざる男」
- 「巻四の三」大壁源五左衛門（出頭）↓「出頭に暇なき……新参者」「古座の諸士をないがしろ」「権威己がまゝふるひし」
- 「巻四の四」勝浦孫之丞（手跡の名高き侍）↓「非道数々」・姜↓「心の浅く」
- 「巻五の一」坪岡蔵人（出頭家老）↓「悪事頭はれ」
- 「巻五の二」十倉新六（近習）↓「執心ふかく」「時の権をかつて」「御側に倅人」・若殿・女中頭↓なし
- 「巻五の三」椿井民部（大組頭）・綱嶋判右衛門（傍輩）↓なし
- 「巻五の四」篠村三九郎（傍輩）・友枝為右衛門（武辺人にすぐれ）↓なし
- 「巻六の一」随夢（楽隠居）↓「世をいやましに恥給はず……よしなき御無理……女蘭の中間にさへ疎み果ける」「畜生にはおとれり」・薄雲（女蘭）↓「難義をたくみ、女心のおそろしく」
- 「巻六の二」葉田与七郎（若侍）・小伴新四郎（同）・久志小左衛門（同）↓「忽、神罰の頭はれ」
- 「巻六の三」外山白石衛門・坂野用助（当番の侍）↓「侍畜生」・乙息流之進↓「億病千万」・「武士の本意に背き……天罰のがれず」
- 「巻六の四」赤西寺八（大小性）↓なし
- 「巻七の一」磯辺頼母↓「男に色ふかく……酒嬌」「人非畜生」「侍畜生」
- 「巻七の二」葉田川九郎次（傍輩）↓「不義」
- 「巻七の三」南江主膳（出来出頭）↓「侍の道にかけたる、わる口」・大七（沖浪大助の子）↓「不孝……殺生のみに、目を容れし、罰当」
- 「巻七の四」小見山惣左衛門（物頭役）↓「万に理屈がましく、武を高く振ひ」・里鐘弥七（郷左衛門の子）↓「無分別」

- 「巻八の一」猪谷久四郎（御物あがり）↓「よろしからぬ沙汰して、久四郎を悪みける」
- 「武運のつき」
- 「巻八の二」松枝清五郎（出頭若さかりの男）↓なし
- 「巻八の三」樗木工弥（出来出頭）↓「欲心萌し」
- 「巻八の四」高砂丹兵衛（傍輩の侍）↓「武命の盡」

横暴な松枝清五郎（巻八の二）や樗木工弥（巻八の三）について、西鶴が「我まま」などという批判的言辞を投げかけないのは象徴的だ。なぜなら、彼らはそれぞれ「出頭若さかりの男」とか「出来出頭」と記された時点で、〈悪〉としての性格付けが完了していたからである。

福岡軍平（巻二の二）は曾て「仁牀すぐれて」とか「武芸に達し」と評されていた。ところが、逃走生活を経て討ち手と巡り合った時の彼はこう書かれたのである。「億病風（億病）に引籠り」「むかしの勇力出ず」と。逃走生活が人格までも変える。そんな変化を西鶴は鋭く見詰め手厳しく評するのである。篠原文助（巻三の三）や青柳十藏（巻四の一）の如き、潔い最期を見せろと。

以上、〈悪〉の造型と、それに導かれる悲劇的世界の形成という視点で、『武道伝来記』を読んでみた次第である。繰り返す言うなら、武道を捨てて当世に順応しながら小器用に生きる武士たちを〈悪〉として造型し、それが導き出す悲劇的な空間の中で人の心がどんな反応を見せ、人々がどんな生き方をするかを実験的に見たのが『武道伝来記』なのである。そういった意味で、『武道伝来記』の歴史的空間は、当世として置換可能な空間でもあった。それでは、西鶴に敵討ちの空しさを訴えたり、武家社会の習俗や御政道を批判するという意図はあったのか。確かに、潜在的には、あったかも知れない。しかし、『武道伝来記』を執筆した時点での彼の意識の中にそれが顕在化していたとは、どうしても思えないのである。

なるほど、『武道伝来記』は人々の豊饒な反応を伝えるに専らで、「俳味」（森鉄三氏・前掲書）に欠けるかも知れない。しかし、貞享三（一六八六）年から元禄元

(二六八八)年という、西鶴の「多作期」にあって、敵討ちというような非日常的な状況を仮構し、平穩な日常生活の中に秘められた、人々の非日常的素顔を別出しようという冒険を試みたことは無意味ではなかった。その手法が、その後の作品にどう継承されて行くかについては、稿を改めて述べるつもりである。

## 註

一 都の錦の著作活動および伝記については、次の諸考がある。

○野間光辰氏『都の錦獄中獄外』(『国語国文』昭和二十三年一月・同二十四年三月)。

○浜田啓介氏『都の錦に関する一資料』(『鹿児島大学教育学部研究紀要』15・昭和三十八年二月)。

○若木太一氏『都の錦『播磨稻原』をめぐって』(『江戸時代文学誌』一・昭和五五年)。

○拙稿「やつし致し都の錦の蹉跌」(『緑園詞林』昭和四九年一月)。

二 従属的悲劇とは、本来近松門左衛門の世話物などへの評語として使われている用語であるが、ここでは悲劇に巻き込まれる係累というような意味で使っている。

三 『武道伝来記』の書誌的問題については別掲の表(二六頁)にも示したが、○陣峻康隆氏『定本西鶴全集(4)』(解説)○野間光辰氏監修『西鶴』(解説)○野田千平氏『武道伝来記』(巻二の三)・(巻三の三)の挿絵の構図が、それぞれ『懷硯』(巻三の二)や『本朝二十不孝』(巻三の三)に似ていることなど、多くの興味深い問題提起をしている(同書三八二頁から三八五頁)。

なお、西島孜哉氏は右の書誌的問題を踏まえて、「原『武道伝来記』と『近代武道鑑』に分けながら、『武道伝来記』の成立についての仮説を述べた(『武道伝来記』の成立について『日本近世文学会春季大会』昭和五八年六月二五日)。西島氏によつて投げかけられた仮説をどう受け止めるかについては評価が割れるとしても、柱刻が『武道鑑』と『武道』の二種に分れており、それが『武道伝来記』の成立、ひいては貞享三年にはじまる西鶴の多作期の解明に何らかの示唆を与えていることはまぎれもない事実であり、今後の大きな課題として別稿を期したい。

四 この手法と、『本朝桜陰比事』(元禄二年)のそれ、(例えば巻二の一「十夜の半弓」など)とが似ていることは、注意しておく必要があるようだ。

五 例えば、巻六の一「女の作れる男文字」。ここでの〈悪〉は、一橋への寵愛を妬み奸計を施す傍輩女蘭の薄雲と、それに乗り嫉妬に狂って一橋を折檻した後手討ちにする主人(随夢)の二人に設定されて、二人とも遂には討たれるという結末になっている。こ

んな点、似たような設定ながら、一方の〈悪〉のみを裁き、当の主人の責任を曖昧にした『男色大鑑』(巻二の二)との差が見られる。

## ○付記

本稿の校正中、西島孜哉氏より御編書『武道伝来記』(桜楓社・昭和五八年一月一日刊)を頂戴した。早速拝読し、多くの啓発を受けたが、中でもその「解説」は注三に示した氏の仮説が整然と論理化されていて興味深かった。その大綱は西島氏の近稿『武道伝来記』論(『武庫川女子大学紀要』三一)に纏められると思うが、それを俟ち、再度私の考えをまとめてみたいと思う。